

岐阜大学大学院
自然科学技術研究科
岐阜大学・インド工科大学グワハティ校
国際連携食品科学技術専攻（修士課程）
学生の確保の見通しを記載した書類

平成30年6月

岐阜大学

1. 学生確保の見通し及び申請者としての取組状況

(1) 学生の確保の見通し

① 定員充足の見込み

本学は農業生産を基盤とする食品関連産業に関わる技術者の養成に古くから強みを持つ。これまでに農学部（昭和 24 年設置）、応用生物科学部（平成 16 年設置）、それらの学部を基盤に設置された大学院を通して、食品産業を中軸とする生物産業の発展に貢献する人材を育成してきた。平成 29 年には、本学が強みを持つ領域（生命、環境、ものづくり）を相乗的に強化するため「自然科学技術研究科（修士課程）」を設置し、高度理工系人材育成を行っている。特に、イノベーションを生む力を育むデザイン思考教育や国際化に対応する能力を強化する Advanced Global Program（英語で実施するグローバル型人材育成プログラム）などを実施している。日本の食品関連産業においては、新しい生物資源（果物や野菜）を積極的に活用した新しい食品の開発、さらには、人口減少と高齢化による産業衰退化を見据えた海外新市場の開拓などを戦略的に進めて行く必要がある。本学が位置している東海地域（岐阜県、愛知県、三重県、静岡県）には、質の高い食品加工製品を生産できる多くの中小企業がある。なかには、国際展開を指向しつつも、国外事情の複雑さからその好機を捉えられない企業もある。

連携外国大学であるインド工科大学グワハティ校（以下、「IITG」）は、インド北東地域にあるアッサム州の中心都市グワハティにある、インド最高研究機関・インド工科大学の一つである。インド北東地域は近い将来、東南アジアとインド周辺諸国を結ぶ物流の重要拠点となることが見込まれ、同地域の経済発展が大いに期待できる。同地域にある IITG に対し、我が国を含む東部アジア地域との連携を担う役割が大いに期待されている。一方、インド北東地域は、生物生産に適し生物資源の宝庫であり、生物資源の生産と利用を基軸とする食品関連産業の振興が望まれている。しかし、工学を中心とする現在の IITG における教育・研究体系では、食品関連産業を担う人材の育成が不十分な現状にある。

平成 22 年、本学と IITG との間で共同研究並びに学生・若手教員の相互交流を開始した。その後、両大学間の交流の過程で、日印双方の食品関連産業を活性化させる人材及びその人材を指導・育成できる研究開発人材や大学教員が必要であり、かつ本学と IITG の教育研究資源を有効に活用する国際連携専攻（修士課程）と国際連携専攻（博士課程）をそれぞれ設置することによって、求められている人材を養成できるとの結論を得た。そして係る人材は、食品に関する日印両地域の実情に詳しく両地域の具体的課題を発見・解決できる技術者人材として社会的に求められている。

自然科学技術研究科を母体組織として今回設置を申請する岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携食品科学技術専攻（修士課程）は、両大学の強みを活かした食品科学と関連技術（以下、「食品科学技術」）に関する独自の教育プログラム（国際連携プログラム、以下、「JD プログラム」）を構築し、食品に関連する日印両地域の課題を解決できるグローバルな視点を備えた高度専門職業人を養成することを目指す。食品関連産業の振興のためには産業を直接下支えする技術者が必要であり、産業振興に貢献できる程度の人数が求められる。

一方、輩出する人材の質保証も踏まえる必要がある。上述の人材を指導・育成に向けた、食品科学技術に関する高い専門性を持つ教員を本学は19名、IITGは43名選抜した。これらの教員は主指導教員候補者である。これらの教員は、国際連携専攻学生及び各校の通常専攻の学生を指導することになる。2国間にまたがる学生の教育・研究指導等は、よりきめ細やかなものが求められるため、以上の点を考慮した上で、本専攻の入学定員を10名とし、本学及びIITGともにそれぞれ5名程度を選抜する予定である。なお、本専攻の収容定員は20名、母体となる自然科学技術研究科の収容定員は750名であることから、2割以内となっている。

また、以上により設定された学生定員を充足する見込みについては、学部学生へのアンケート結果から進学希望者数を推測し、十分充足可能な定員設定であることを確認した。

なお、両大学から本専攻に入学する学生数に大きな偏りは生じないものと推測されるが、生じた場合は、本専攻の合同運営委員会で協議し入学者数を調整するなど適切な対策を講じることとする。

② 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

本国際連携専攻の第1期生に相当する学部3年生（本学応用生物科学部応用生命科学課程3年生及び生産環境科学課程応用植物科学コース3年生、母数124名、回答数120名）に対しアンケートを実施した（平成29年10月、資料1）。その結果、「今後の進路として、当該専攻への進学についてどう思いますか」との質問に対して、本専攻に「大いに興味がある」ものは17名（回答数に対して14%）、「やや興味がある」ものは47名（回答数に対して39%）であった（資料2）。従って、岐阜大学側の定員5名に対して、定員を超える受験者を確保できると想定できる。実際、9名の学部3年生が本専攻の専任教員候補者（本専攻に関する情報提供を行った者）の元に直接問い合わせがあり、学生に対して本専攻に関する情報を提供した。さらに、上記の質問「今後の進路として、当該専攻への進学についてどう思いますか」について「今のところ特に興味・関心がない」と答えた者に対して、「どのようなことがあれば進学してみたいと思いますか」（複数回答可）を問うたところ、「英語の添削指導など語学支援や就職支援、経済的支援（授業料減免、奨学金等）」があれば進学してみたいと思うとの回答が多かった（資料2）。これらの項目について具体策を検討し、絶えず周知を続けることで、安定した学生確保に努める。

本学は本年度から日本人学生の留学前英語教育プログラム（ESL、主たる対象学年は学部1年生及び学部2年生）を新たに開始した。本学はESLを発展させたプログラムとして専門英語海外短期研修プログラム（ESP）の開講を目指し、そのニーズを調査するアンケートを平成29年6月頃に実施した。対象者は本学応用生物科学部の学部4年生、学部3年生、学部2年生と、本学工学部の学部4年生と学部3年生及び本学自然科学技術研究科に在籍する工学系の修士1年生と修士2年生である。そのアンケート結果（資料3）にある「4. 理工系英語への興味」によると、回答数に対し半数を超える学部学生及び大学院生が①理工系英語に重点を置いた英語コース（学内設置）への参加に興味を示している。一方、②英語圏の海外協定校での理

工系英語コース[専門英語（理工学系英語）を海外で学ぶプログラム]については、本学応用生物科学部の学部学生 173 名中 102 名（回答数の 59%に相当）が、本学工学部の学部学生 90 名中 39 名（回答数の 43%に相当）がプログラムへの参加に興味を示している。この結果に基づき現在、本学は専門英語海外短期研修プログラムである ESP の開講を具体化しているが、今回のアンケート結果は、現時点でも海外での専門教育を臨んでいる学生が確実に居ることを示している。今後、本学が学部の低学年から受講可能な ESL 及び ESP を含む国際化プログラムを推進することによって、海外で学ぶために必要なスキルと海外で学ぶマインドを持つ学生数を増やすことができる。そして、留学を伴う教育環境で学ぶ JD プログラムへの進学を希望する学生を増加することができる。

本学は、平成 29 年 12 月 6 日から 12 月 21 日にかけて第 3 回となるウインタースクールを開催した。平成 31 年度に JD プログラムを開設することを視野に入れ IITG とマレーシア国民大学から合計 7 名の学生を受け入れた。ウインタースクールの学生の選考に当たって、ウインタースクールの応募者に対し JD プログラムを説明した上で「IITG と岐阜大学との JD プログラム（博士課程及び修士課程）に興味があるか」を聞いたところ、JD プログラム（修士課程）に入学可能な IITG 学士学生 32 名中 27 名（回答数の 84%に相当）及び JD プログラム（博士課程）に入学可能な IITG 修士学生 19 名中 12 名（回答数の 63%に相当）が各 JD プログラムに大いに興味があることが分かる（資料 4）。一般的にインドでは、学部で卒業する大学とは別の大学の修士課程に進学し、修士課程で卒業する大学とは別の大学の博士課程に進学する。そのため、IITG に在籍する学生に対する今回のアンケート結果がそのまま本 JD プログラムへの希望者とは一致しないものの、今回明らかになった JD プログラムに対する高い関心度を踏まえ IITG 入学学生の定員の目安（修士課程では 5 名、博士課程では 1 名）と比較すると、定員を超える受験者を十分に確保できると想定できる。

③ 学生納付金の設定の考え方

本専攻においては、両大学における授業料等の学生納付金の設定等について、IITG と協議した結果、検定料、入学料、授業料といった学生納付金については、それぞれの大学が定め、本専攻学生が入学手続きを行う大学において徴収することとしている。なお、本学で入学手続きを行った学生については、文部科学省の「国立大学等の授業料その他の費用に関する省令」に示されている検定料、入学料、授業料の標準額と同額である。

また、本学入学学生に対しては、入学料及び授業料免除制度の情報を提供する。

（2）学生確保に向けた具体的な取組状況

本年度（平成 29 年度）4 月に実施した学生へのガイダンスの場を使い、本年度から新たに開始した日本人学生の留学前英語教育プログラム ESL と、平成 31 年度から開講予定の海外協定大学との JD プログラムについて説明を行った。説明を行った対象者は、本学応用生物科学研究科（自然科学技術研究科）応用生命科学専攻（生命科学・化学専攻）及び生産環境科学専攻における修士 2 年生、修士 1 年生、修士

学生の保護者、本学応用生物科学部応用生命科学課程及び生産環境科学課程における学部4年生、学部3年生、学部2年生、学部1年生及び学部1年の保護者である。具体的には、学部の英語教育（ESL や奨学金制度、留学サポート制度）、大学院進学の意味（修士課程及び博士課程）、JDプログラム及びデュアルディグリープログラムへの進学を含む包括的かつ体系的な内容を説明した（資料5）。特に、学部1年から博士課程に至る全ての学年に対して学生が受講可能な国際化プログラムが提供されていることを強調して周知した。

本年度7月には、学部3年生（本学応用生物科学部応用生命科学課程所属）の研究室分属説明会の場を使い、本専攻設置の趣旨、養成する人材像、カリキュラム等、JDプログラムに関してその時点で周知可能な内容を説明した。

本年度10月末に実施された第69回岐阜大学祭において、国際連携専攻を宣伝するブースを出店する計画を立て準備を行った（資料6）。当日は雨天になりブース展示は中止になったが、準備した資料を使って後日、学内で展示を行い、JDプログラムについて情報発信を行った。

現在、本学が設置を計画している国際連携専攻に関する情報を下記の大学ウェブサイトに掲載している（資料7）。

<https://www.gifu-u.ac.jp/international/>

トップ>国際交流>国際戦略>国際連携専攻（ジョイントディグリー・プログラム）：設置認可申請準備中

2. 人材需要の動向等社会の要請

(1) 人材養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

本国際連携専攻（修士課程）設置の目的は、東海地域とインド北東地域を中心とする日印両国の食品関連産業を牽引する高度専門職業人を養成することである。そのため、化学や生物学に興味を持ち、食品科学技術に関する専門性とデザイン思考活用力を基盤として、食品に関連する日印両地域の課題を解決できる「グローバルな視点」を持つ人材を養成する。さらに、国際連携プログラムの特長を活かし、英語を共通言語としてコミュニケーションする力、国際的対応力（異文化適応力と国際的協働力）及び産業を牽引するリーダーとしての資質を育てる。

上記の人材像を実現するための3つの教育ポリシーを以下に示す。

(ア) ディプロマポリシー（学位授与の方針・人材育成像）

本専攻では以下のような能力を備えた人材に修士の学位を授与する。

- ①食品科学技術に関する学理と技術を応用する能力
- ②デザイン思考の活用力
- ③英語を共通言語としたコミュニケーション能力
- ④高度専門職業人として研究を実践する力及び研究をプレゼンテーションする力

本専攻は、修了者の上記能力の修得度・達成度を適切に評価し、厳格な学位認定を行う。

(イ) カリキュラムポリシー（教育課程の編成・実施の方針）

本専攻は、自然科学技術研究科におけるカリキュラムポリシーに加え、食品科学

技術に関する学理と技術を実践的に応用する能力を涵養するためのカリキュラムを編成する。そのために、以下の方針に沿った教育を実施する。

- ①連携を組む両大学の強みを活かした相乗的な教育を行う
 - ②デザイン思考を取り入れた研究リテラシーの導入と修士論文研究の共同指導を行う
 - ③日印双方向留学への配慮を行う（日印の学生が両国で共に学ぶ環境を作る）
 - ④異文化や日印双方の産業界の理解を深め、国際的対応力を養う
- (ウ) アドミッションポリシー（入学者受け入れの方針）

本専攻は、留学を伴う国際的な教育環境の中で食品科学技術を学び、食品に関連する日印両地域の課題解決に貢献しようとする学生を求める。このためには、以下のような資質が必要となる。

- ①化学及び生物学を中心とする専門的な学理と技術を既に修得し、さらに食品科学技術に関する高い専門性を得ようとするもの
- ②能動的な研究活動を実践する意欲のあるもの
- ③英語を共通言語とし留学を伴う教育環境で学ぶ意欲のあるもの
- ④文化的な違いに適応し協働する意欲と産業界のリーダーとなる意志をもつもの

(2) 上記(1)が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

インドは、世界第二位の人口を有し、国内総生産の成長率が高く、若年層の割合が高く労働力確保が比較的容易であることから、今後、巨大市場としての成長が期待できる。さらに、高い経済成長率、識字率の向上を背景に、高等教育を望む中流階級が今後10年で500万人を超えると推計されている（Understanding India: The future of higher education and opportunities for international cooperation, British Council, 2014）。インドは、次世代を担う優秀な人材の獲得ターゲットとしても非常に魅力的な国である。

インド国内の食品関連産業に着目すると、同産業は未成熟で、例えば果実類及び野菜類ではわずか数%しか加工されず、消費者の口に入ることなく無駄に廃棄されている実情がある。例えば、食品加工産業に関する報告（2011年：Food processing may triple to \$900 b by 2020: Study, THE HINDU, BusinessLine, 16 Nov, 2011）によると、農産物の加工率は中国で40%、タイ30%、フィリピン78%、マレーシアでは80%であるのに対し、インドでは20%に留まっている。食品別の加工率をみると、乳製品で35%程度であるのに対し、果実/野菜類では2.5%しか加工されておらず、大部分は加工されることなくそのままの形で消費されている。インド・食品加工産業省の「将来構想2015（2011年発刊）」によると、かなり低い程度に留まっている果実/野菜類の加工率を6%から20%へ上昇させることが政府目標となっているが、実際には2013年度での同加工率は10%に留まっている（Food processing industry in india: adding value by creating synergy between agriculture and industry, Onicra Credit Rating Agency of India, released in 2013）。果実/野菜類が無駄になっている率は2010年で累計5.8~18%、2015年で4.58~15.88%と推定されている（Annual report 2016-2017

from the Ministry of Food Processing Industries of India)。言い換えると、現時点においても、果実/野菜類の加工率は決して高い状態にあるとは言えず、無駄に廃棄されている現状があると考えられる。この果実/野菜類の加工率の向上に貢献できるような産業ができたならば、それはインド国内の貧困削減と人口増に伴う雇用創出に直接結びつく。そのためには、農産物の生産から食品加工、流通、消費までをつなぐ付加価値の連鎖すなわち「フードバリューチェーン」をインド国内に構築することが求められている（グローバル・フードバリューチェーン推進官民協議会第1回インド部会「インドにおけるフードバリューチェーン構築の取組について」平成27年5月15日（農林水産省））。インドの食品産業を食品科学と関連技術に裏打ちされた、より高度で先進的な食品関連産業へとアップグレードすることがいま現在求められている。

一方、上述のように、日本の食品関連産業においては、新しい生物資源（果物や野菜）を積極的に活用した新しい食品の開発、さらには、人口減少と高齢化による産業衰退化を見据えた海外新市場の開拓などを戦略的に進めて行く必要がある。本学が位置している東海地域には、質の高い食品加工製品を生産できる多くの中小企業があるが、なかには、国際展開を指向しつつもその好機を捉えられない企業もある。そこで、東海地域及びインド北東地域の食品関連産業を橋渡しすることができれば、両地域におけるイノベーション創出ひいては両地域の活性化につなげることができる。これらの実現に向け、食品に関する日印両地域の実情に詳しく両地域の具体的課題を発見・解決できる技術者人材が社会的に求められている。

なお、IITGとの国際連携専攻実施に向けた連携活動は「日印高級実務者政策対話」（平成28年7月7日 文科省・インド人材開発省）会議において、両国政府の連携の枠組みのなかで、高等教育における連携活動事例として紹介され、認知されている。

本学応用生物科学部（平成19年開設）は、食品・医薬品・環境・健康などの生物産業へ人材を輩出する食品生命科学課程（後の応用生命科学課程）からは852名の学士を、生物生産と環境保全に関連する生物産業へ人材を輩出する生産環境科学課程からは871名の学士を輩出してきた（資料8）。さらに、本学応用生物科学研究科（平成20年開設）は、食品・医薬品・環境・健康に関連する資源生命科学専攻（後の応用生命科学専攻）からは369名の修士を、生物生産と環境保全に関連する生物環境科学専攻（後の生産環境科学専攻）からは345名の修士を輩出してきた（資料8）。これらの人材は主には日本国内の生物産業に関する技術者や研究者、公務員などの職を得てきた。本専攻の修了者は、食品科学技術に精通し国際性とイノベーション創出想法を備えた修士号技術者として、インドを含む世界各国に展開する食品関連産業や国際的な研究機関で活躍が期待できる。

添付資料

- 資料 1 国際連携専攻についてのアンケート様式
- 資料 2 国際連携専攻についてのアンケート集計結果
- 資料 3 専門英語海外短期研修プログラム（ESP）のニーズ調査アンケート
- 資料 4 IITG 在籍学生の JD プログラムへの興味に関するアンケート
- 資料 5 応用生物科学部学生が受講可能な国際化プログラム（抜粋）
- 資料 6 第 69 回岐阜大学祭におけるブース展示のチラシ
- 資料 7 大学ウェブサイトに掲載中の国際連携専攻に関する情報
- 資料 8 応用生物科学部並びに応用生物科学研究科の修了生数

2017 年 10 月

国際連携専攻についてのアンケート

岐阜大学自然科学技術研究科では、国際化の推進と教育研究力のさらなる向上を図るため、2019 年度(平成31年度)に、海外協定校のインド工科大学グワハティ校(インド)と協働し、国際連携専攻(ジョイント デイグリー プログラム)を修士課程に創設することを計画しています。つきましては別紙記載の「設置構想」をご確認の上、下記の質問に回答し、皆さんの率直な意見をお聞かせ下さい。

[注意事項]

- ・ このアンケートは設置構想にかかわる基礎的資料として活用するために実施しており、その目的以外には使用しません。
- ・ 回答の内容により、不利益を被ることは一切ありません。
- ・ 別紙の「設置構想」を必ず確認してから回答してください。

記

- ① あなたの性別をお答えください。
1. 男
 2. 女
- ② 今後の進路として、当該専攻への進学についてどう思いますか？
1. 大いに興味・関心がある
 2. やや興味・関心がある
 3. 今のところ特に興味・関心がない
- ③ 質問②で3. と回答した方。 → 以下のことがあれば進学してみたいと思いますか？
(複数回答可)
1. 英語の添削指導など語学支援
 2. 卒業後の就職支援
 3. 経済的支援(授業料減免、奨学金等)
 4. インターンシップ制度
 5. 専攻の詳しい内容(研究分野等)
 6. その他()
- ④ 本学のグローバル化への取り組みについて、ご意見等あれば教えて下さい。(自由記述)

【アンケートにご回答いただく前に、必ずお読みください】

※ 本構想は「申請(認可)」前の内容であり今後、変更することがあります。

岐阜大学・インド工科大学グワハティ校 ジョイント ディグリー プログラム設置構想

-----概要-----

- ◇ 専攻名: 自然科学技術研究科 修士課程
岐阜大学・インド工科大学グワハティ校(IITG) 国際連携食品科学技術専攻
- ◇ 開設時期: 2019年(平成31年)4月
- ◇ 入学定員: 専攻10名(本学5名、IITG5名)
- ◇ 授与学位: International Joint Master of Technology in Food Science and Technology
※1枚の学位記を両大学連名で授与
- ◇ 学籍: 岐阜大学と IITG の両方に籍を置く(二重学籍)
- ◇ キャンパス: 岐阜大学および IITG(グワハティ(インド))
- ◇ 標準修業年限: 2年
※修学期間中、インド工科大学グワハティ校へ留学し研究できる機会あり
- ◇ 使用言語: 英語

-----背景-----

岐阜大学は国際化を促進させ、東海地域の活性化とさらなる発展を担う拠点大学を目指しています。東海地域は、グローバル展開しているものづくり企業が多く、今後さらに発展していくためには「地域と世界をつなぐ」役割を担う次世代リーダーの養成がとて重要で重要。このことをふまえ、自然科学技術研究科は、本学の海外協定大学でアジアの中核的な役割を担うインド工科大学グワハティ校(IITG)と連携し、企業も参画するリーダー養成プログラムとして、国際連携専攻(JD)を開設します。

-----この専攻で学ぶメリット-----

国際連携専攻は、岐阜大学とインド工科大学グワハティ校の両方に在籍して修学し、修士課程が修了できるともユニークで国際性あふれる大学院教育環境で、そのメリットを活かし先進的かつ独創的な研究に取り組むことができます。修学期間中には海外協定校へ留学する機会がありますので、研究や人脈の幅を広げることができ、コミュニケーション能力も高めることができます。また可能な範囲で経済的支援も現在検討中です。修士の学位は、岐阜大学とインド工科大学グワハティ校の両大学の連名で授与され、たいへん国際性が高い価値あるものです。また本プログラムの特色の1つである、デザイン思考を取り入れた修士論文研究を実施することで、地域や国際的な場面でプロフェッショナルなリーダーとして、自信をもって活躍できる真の実践力も身につけることができます。経済発展著しいアジアを舞台に学べるとも魅力的な修士課程プログラムです。

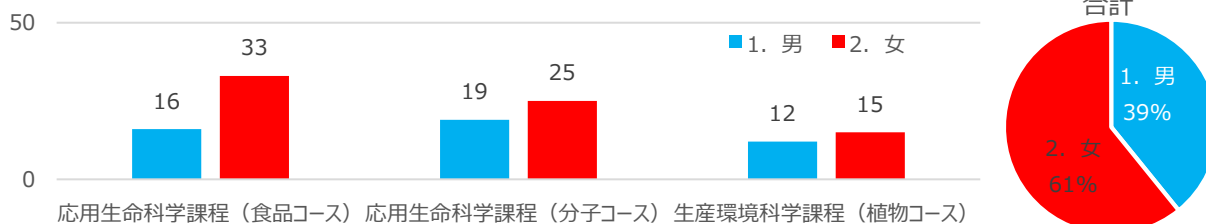
自然科学技術研究科（修士課程）国際連携食品科学技術専攻についてのアンケート集計

応用生物科学部の対象コース生（3年次）にアンケートを実施。

実施数はアンケート実施日に参加した人数（100%回答）。

アンケート区分	実施数	アンケート実施日
応用生命科学課程 食品コース（在籍者数 50 名）	49 名	平成 29 年 10 月 19 日
応用生命科学課程 分子コース（在籍者数 45 名）	44 名	平成 29 年 10 月 20 日
生産環境科学課程 植物コース（在籍者数 29 名）	27 名	平成 29 年 10 月 20 日

【回答者基本情報】

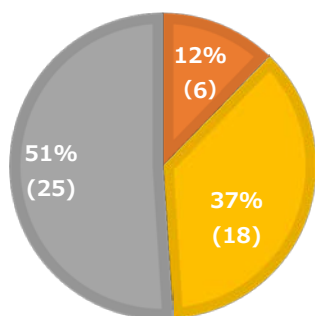


【アンケート結果】

●今後の進路として、国際連携食品科学技術専攻への進学についてどう思いますか？ ※（ ）は人数

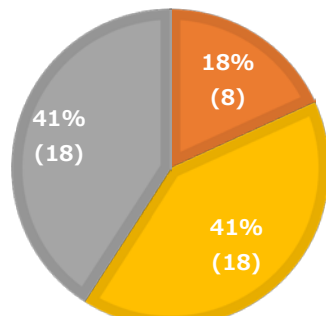
応用生命科学課程（食品コース）

- 1. 大いに興味・関心がある
- 2. やや興味・関心がある
- 3. 今のところ特に興味・関心がない



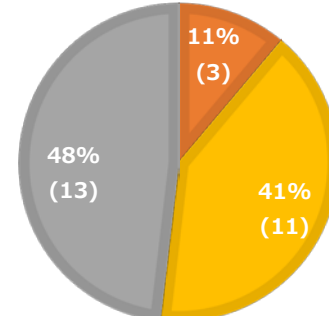
応用生命科学課程（分子コース）

- 1. 大いに興味・関心がある
- 2. やや興味・関心がある
- 3. 今のところ特に興味・関心がない

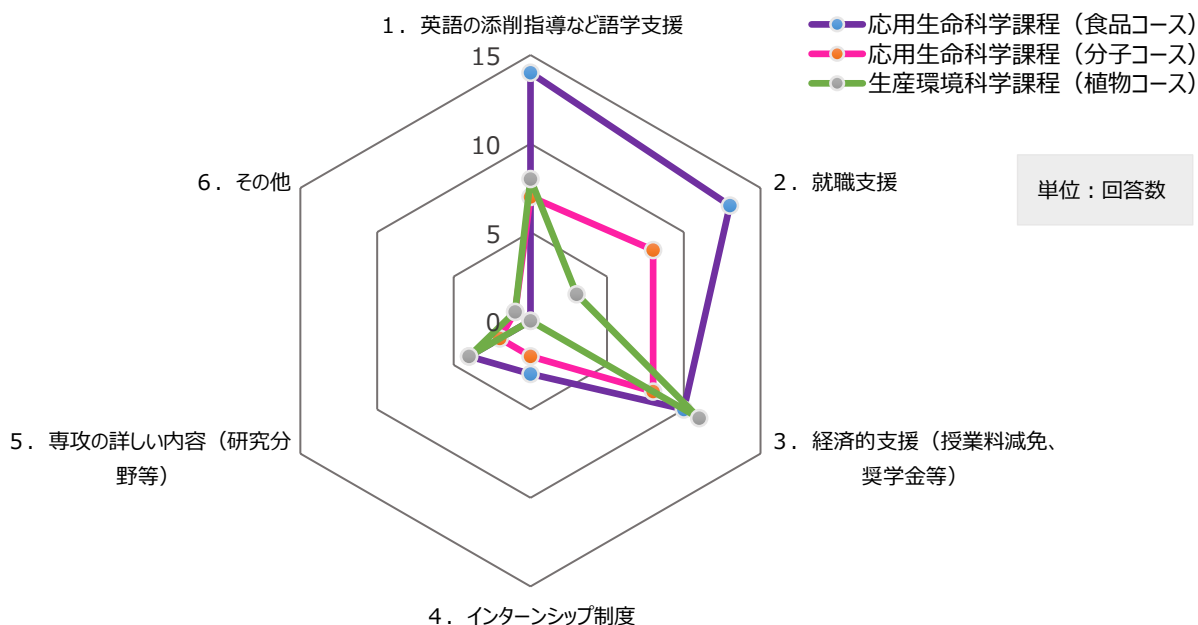


生産環境科学課程（植物コース）

- 1. 大いに興味・関心がある
- 2. やや興味・関心がある
- 3. 今のところ特に興味・関心がない



●上記の質問で、3. と回答した場合、どのようなサポートがあれば進学してみたいと思いますか？（複数回答可）

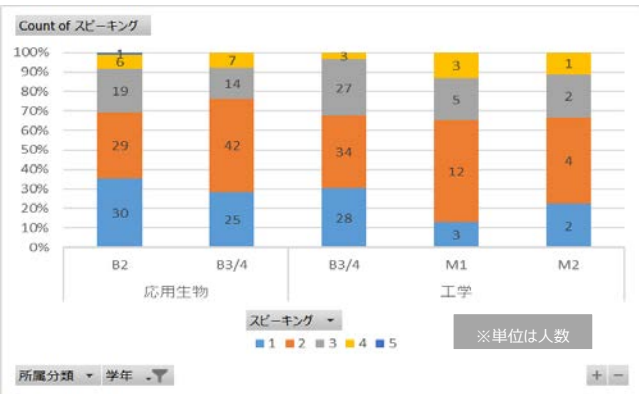


理工系英語に関するアンケート（2017年）

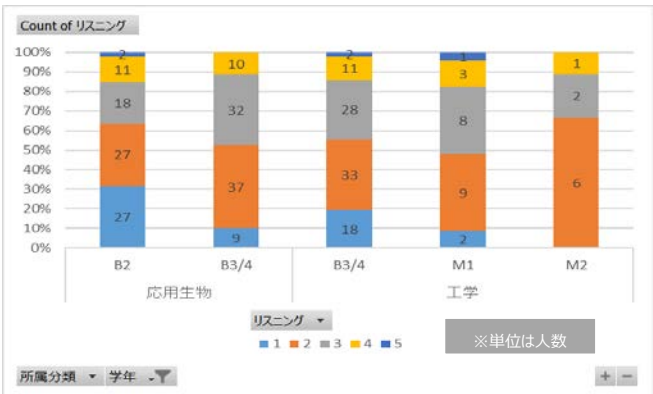
ESP（専門英語海外短期研修プログラム）のニーズ調査として実施したアンケート、「ニーズ分析調査：理工系学術英語」の一部を抜粋し再編。アンケートは2017年6月頃にプログラムコーディネータのレイモンドコウ先生を中心に実施された。

1. 英語の自己認識レベル（1（低い）< 5（高い）、-は回答無し）

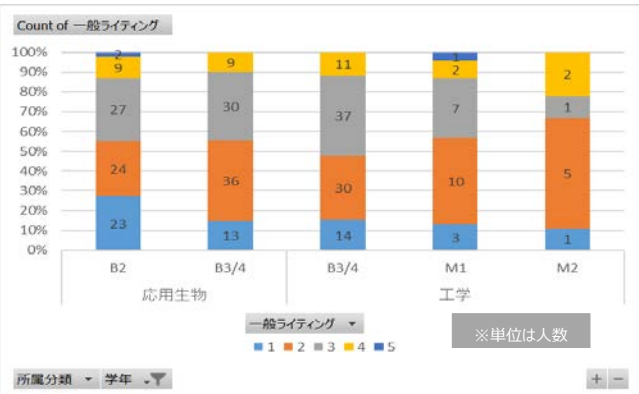
①スピーキング能力



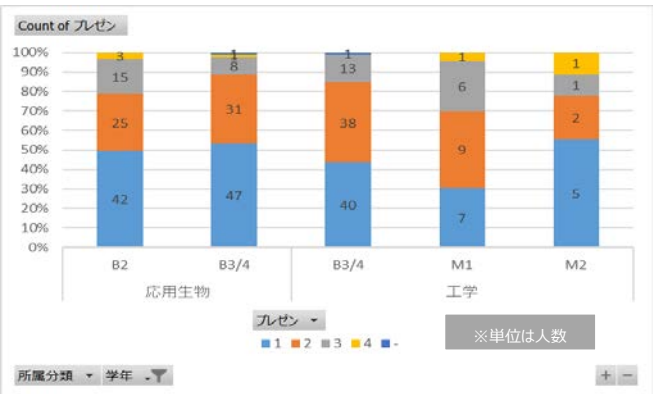
②リスニング能力



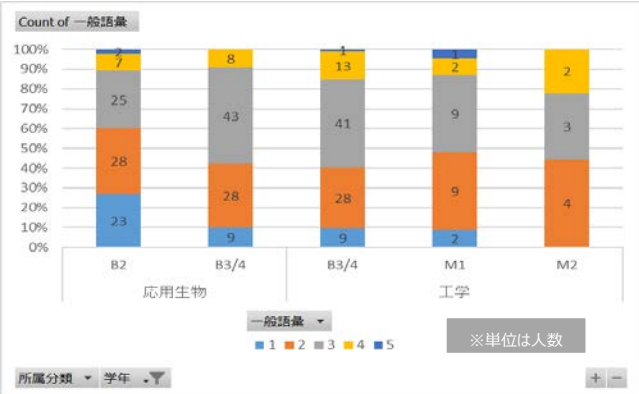
③一般ライティング能力



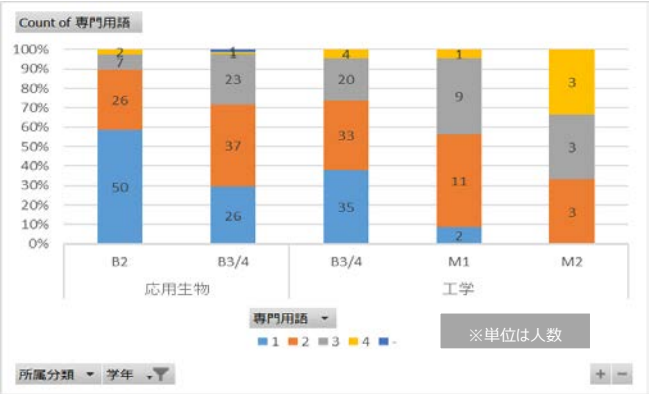
④プレゼンテーション能力



⑤一般語彙習得レベル

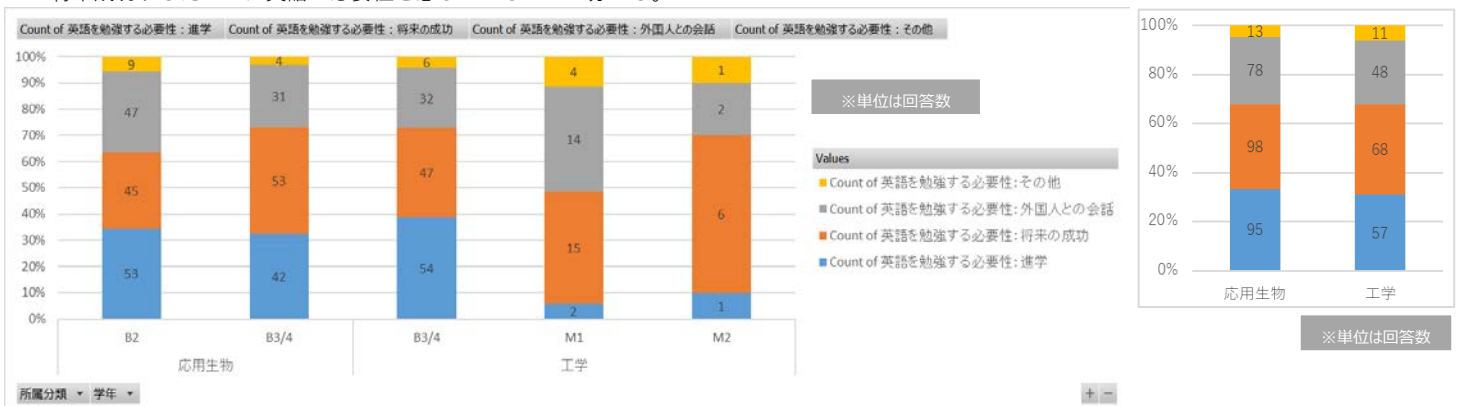


⑥専門用語習得レベル



2. 英語を勉強する必要性（複数回答可）

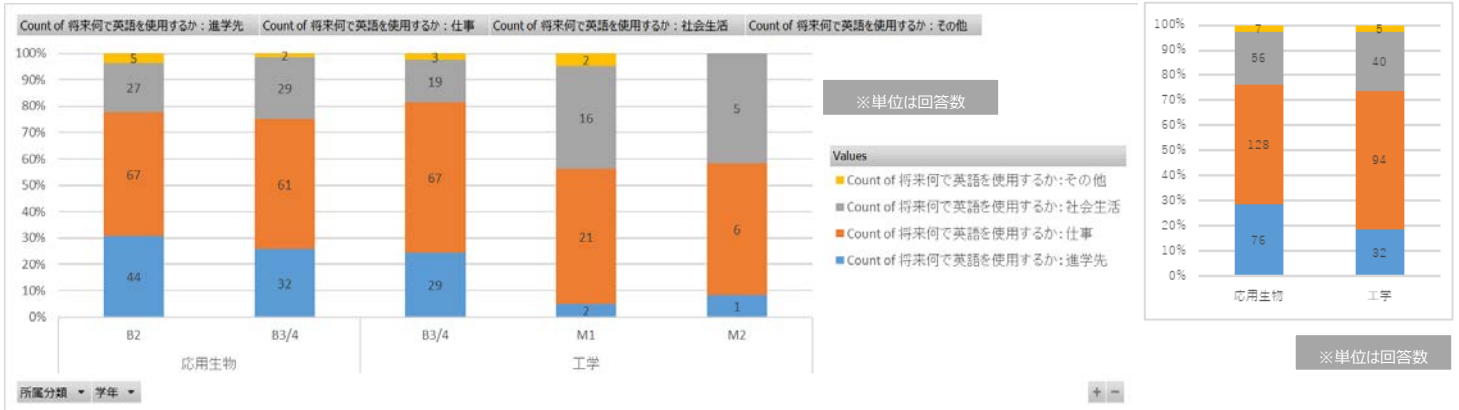
※必要性に関しては応生、工学系共に割合から見て大きな変化は無いが、工学系で調査した修士学生と学部学生を見ると、修士課程中に、将来成功するためには英語の必要性を感じていることが分かる。



理工系英語に関するアンケート（2017年）

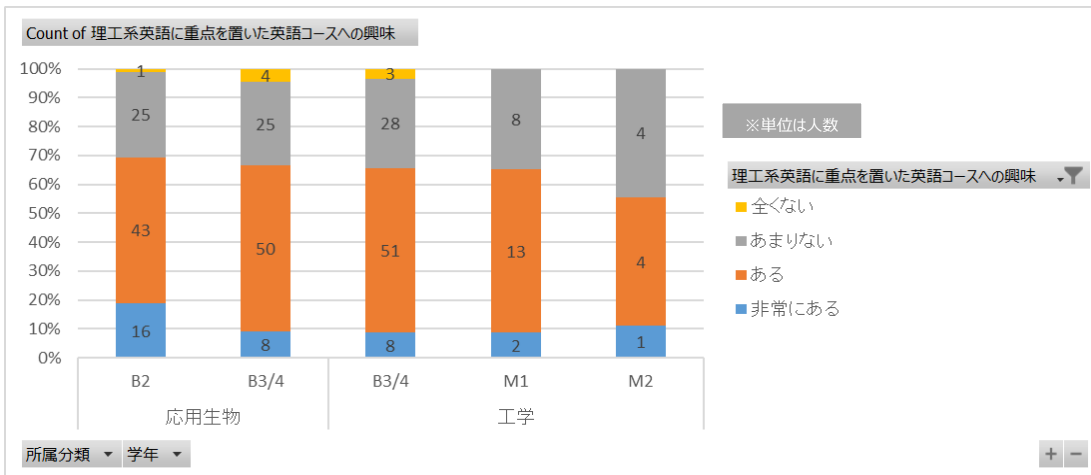
3. 将来何で英語を使うか（複数回答可）

※応生の方が進学時での英語の必要性を感じる傾向が高く、工学では将来の成功のために必要と感じる傾向が高い。



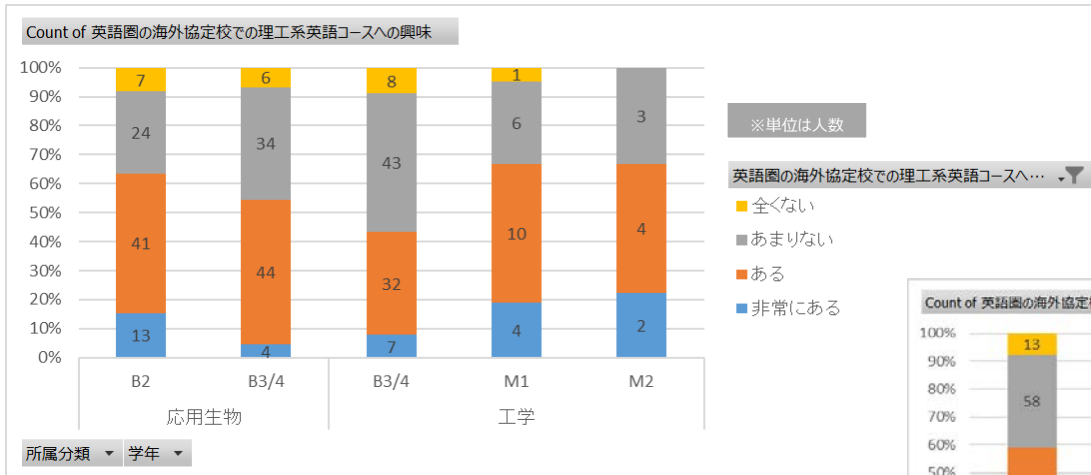
4. 理工系英語への興味

①理工系英語に重点を置いた英語コースへの興味（学内）



※学内で実施する専門英語（理工学系英語）に重点を置いた英語プログラムに対する興味は、応生及び工学に置いて半数以上の学生が興味があるとされている。部局間の差はさほど見られない。

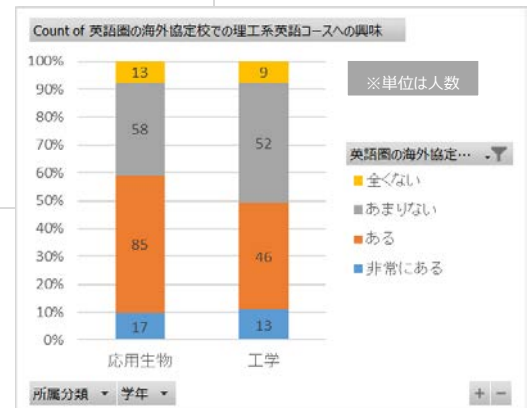
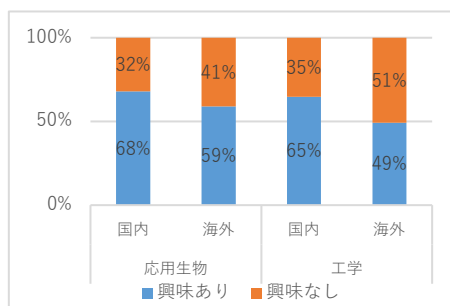
②英語圏の海外協定校での理工系英語コースへの興味（ESPプログラムのニーズ）



※専門英語（理工学系英語）を海外で学ぶプログラムに関して、応生の方が工学より関心が高い傾向にあるが、工学系においては、修士になると関心が高まる傾向が窺える

③学内と学外（海外協定大学）での専門英語習得プログラムへの関心度の比較

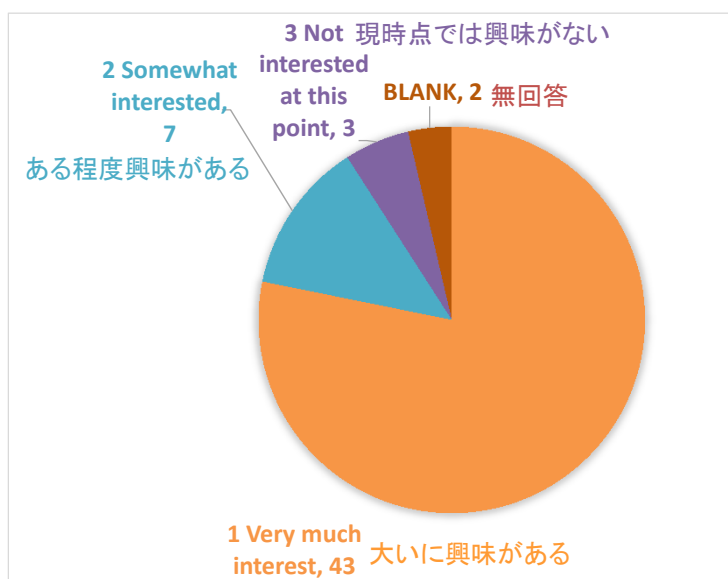
※①、②を使用。



質問: IITGと岐阜大学との間のJDプログラム(博士課程と修士課程)に興味があるか?

Q. Are you interested in the Joint Degree Program (PhD, Master) between IIT-G and Gifu University?

集計	
1 Very much interest 大いに興味がある	43
2 Somewhat interested ある程度興味がある	7
3 Not interested at this point 現時点では興味がない	3
BLANK 無回答	2
計	55



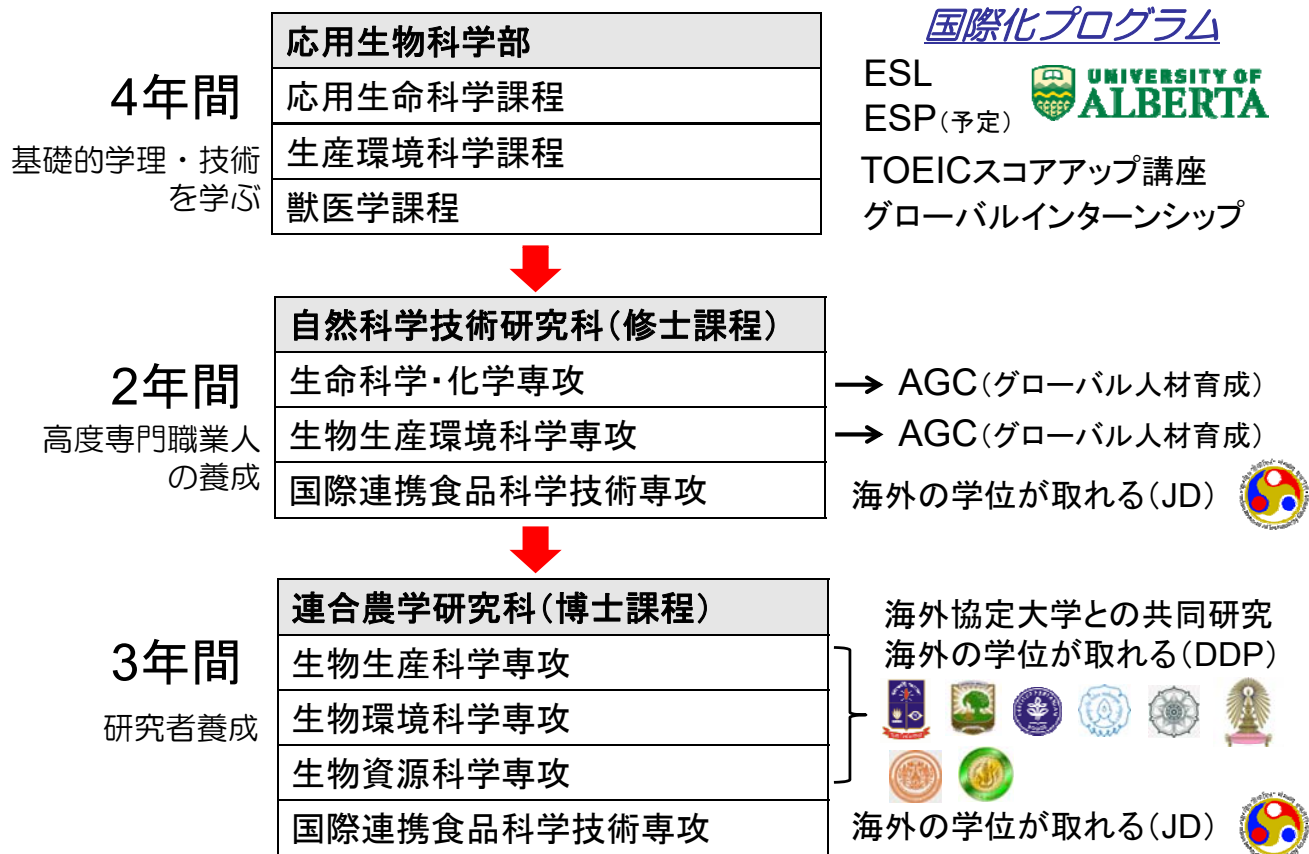
教育課程別の回答

	1 大いに興味がある	2 ある程度興味がある	3 現時点では興味がない	無回答	計
学士	27	3	1	1	32
修士	12	4	2	1	19
博士	4	0	0	0	4

↓
割合で見た場合
↓

	1 大いに興味がある	2 ある程度興味がある	3 現時点では興味がない	無回答	計
学士	84%	9%	3%	3%	100%
修士	63%	21%	11%	5%	100%
博士	100%	0%	0%	0%	100%

応用生物学部学生が受講可能な国際化プログラム



STUDY ABROAD INFORMATION SESSION

カナダアルバータ大学(協定校)

短期留学プログラムと 事前研修の説明会

今年の夏、アルバータ大学(カナダ)で短期留学プログラムを実施します。今回、このプログラムに関する説明会を実施しますので、留学に興味のある学生の皆さんは奮って参加して下さい。

また、このプログラムに参加するためには、本学での事前研修に参加することが必須となります。事前研修に関する説明についても本説明会の中で行います。

日時:

- ① 4月12日(水) 13:00 ~ 13:30
 ② 4月17日(月) 12:15 ~ 12:45

場所: アカデミック・コア (図書館1F)

対象: 留学に興味のある学部生
(事前申込不要)

主催: グローカル推進本部

問い合わせ先:





2017年10月29日(日)

岐阜大学学祭会場 南駐車場

グローバル推進本部出店ブース:

岐阜大学 MAP



⑧ JOINT DEGREE(ジョイント・ディグリー)プログラム: 国際協働学位専攻を設置予定の協定大学を紹介!

⑫ インドの匠 (アッサム地方のテイストのインドカレーを提供してます!!!)

⑧

JOINT DEGREE
そうだ! のX
インド・マレーシア
に行こう!

お気軽にお立ち寄りください☆
~海外留学で差をつけよう~

⑫

Shop info.
French Polynesia (product)

インドの匠
インド北東部の美味しい
カレーを用意して
お待ちしております!!!
~食から体感!
岐阜大学の国際化~

インド工科大学グワハティ校 (IITG)



岐阜大学 学務部
29.10.18
許可済

マレーシア国民大学 (UKM)



ASEAN 経済の要国マレーシア
将来の世界第一位人口・経済となるインド
...今から視野に入れてみませんか?

※売上の一部は大学基金の国際交流にあてられます!



大学案内	学部 大学院	附属施設 図書館	入試案内	教育 学生生活	就職 進路	研究 産官学連携	地域貢献	国際交流
------	-----------	-------------	------	------------	----------	-------------	------	------

受験希望の方へ	在学生・保護者の方へ	卒業生の方へ	地域の方へ	企業の方へ
---------	------------	--------	-------	-------

トップ 国際交流 国際戦略 国際連携専攻(ジョイント・ディグリープログラム)：設置認可申請準備中

国際交流

国際連携専攻(ジョイント・ディグリープログラム)：設置認可申請準備中

国際連携専攻(ジョイント・ディグリープログラム)設置(予定)について

岐阜大学は、国際化の推進と教育研究力のさらなる向上を図るため、平成31年度に海外協定大学の**インド工科大学グワハティ校 (IITG)** および**マレーシア国民大学 (UKM)** とそれぞれ協働し、4つの国際連携専攻を開設することを計画しています。

※設置認可申請準備中

専攻名(仮称)	相手大学[国]	学位	標準修業年限	使用言語
国際連携食品科学技術専攻	IITG [インド]	修士	2年	英語
国際連携食品科学技術専攻	IITG [インド]	博士	3年	英語
国際連携統合機械工学専攻	IITG [インド]	博士	3年	英語
国際連携材料科学工学専攻	UKM [マレーシア]	博士	3年	英語

※上記の内容は予定であり、変更する場合があります。

想定される国際連携専攻の学年進行

国際連携専攻とは、本学と海外協定大学がそれぞれの強みを活かしたカリキュラムをもとに、共同で作成する教育プログラムです。学生は標準修業年限の中で、一定期間を相手大学で学びます。留学を伴う国際的な教育環境の中で講義履修および研究活動を行い、在学期間を延長することなく日本と海外における2大学の連名で、単一の学位を取得することができるよう計画しています。

どのように学ぶのか：修士学生の例

	1年次												2年次															
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
インド工科大学入学の学生					期間1 食品技術を学ぶ インド	期間2 インキュベーション期間 インド	期間3 食品科学を学ぶ 岐阜	期間4 修士論文研究 インド	期間5 修士論文研究 インド	学位審査 インド																		
岐阜大学入学の学生	期間1 食品科学を学ぶ 岐阜	期間2 食品技術を学ぶ インド	期間3 インキュベーション期間 岐阜	期間4 修士論文研究 岐阜	期間5 修士論文研究 岐阜	学位審査 岐阜																						

岐阜大学入学生の場合・・・

- 4月から7月まで岐阜で講義履修と研究を行う(期間1)。
- その後、インドに飛び、8月からインドで講義履修と研究を行う(期間2)。
- 岐阜に戻ったあと、研究を行い、インド入学学生とビデオ会議で研究討論する(期間3)。
- 岐阜大学とインド工科大学の先生からの共同研究指導の下で研究を進める(期間4と5)。
- 学位審査を受けて学位を取得する!

特徴

同年度に入学した日印の学生が共に学びあう期間が8か月ある(の期間)。

国際交流

- 海外への留学
- 本学への留学
- 在籍留学生の皆さんへ
- 卒業する皆さんへ
- お役立ち情報
- 国際協力・国際貢献
- 国際交流支援
- 海外拠点
- 国際交流事業支援
- 国際戦略
 - 岐阜大学グローバル推進本部 (GHOGL)
 - 岐阜大学の国際化policyとvision
 - 国際連携専攻(ジョイント・ディグリープログラム)：設置認可申請準備中
- 刊行物 等

この専攻で学ぶメリット

国際連携専攻は、本学と海外協定大学（IITGまたはUKM）の両方に在籍して修学し、修士課程あるいは博士課程を修了できる国際性あふれる大学院教育環境を提供する予定です。

日本と海外の学位が一度に取得できます

ジョイント・ディグリープログラムで
取得できる共同学位が意味するもの

両大学から質保証された
学位取得者



国際通用性がある修士号・博士号取得者
という社会的地位を得る



就職先

国際展開する企業
国際的な研究機関
国内外の高等教育機関
など



学位記のイメージ

(参考)
協定大学への留学
⇒学位は本学からのみ授与
ダブル・ディグリープログラム
⇒両大学から別々の学位を授与

語句説明

<ジョイント・ディグリー (JD)>

連携する大学間で開設された単一の共同の教育プログラムを学生が修了した際に、当該連携する複数の大学が共同で単一の学位を授与するもの。大学設置基準等の改正により、連携する外国の大学との連名による学位の授与を認められることになった。

<プログラム>

一つ又は複数の大学が、大学、学部及び学科、又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を自ら開設又は共同して開設し、体系的・計画的に編成された一連の教育課程であって、学生がその教育課程を適切に修了したことを厳正に評価し、もって学位の授与又は履修の証明をすることを目的とするもの。

<カリキュラム>

一つ又は複数のプログラムの実施に際し、それらを実現するものとして、一つまたは二つ以上の大学により提供される授業科目や研究指導等の体系。

【引用】中央教育審議会「我が国の大学と外国の大学間におけるジョイント・ディグリー及びダブル・ディグリー等国際共同学位プログラム構築に関するガイドライン」（平成26年11月14日）より抜粋・一部改変

[アイコンの詳細説明](#)

[内部リンク](#)

[独自サイト](#)

[外部リンク](#)

[ファイルリンク](#)

[▲ ページの先頭へ戻る](#)

[大学案内](#) | [学部・大学院](#) | [附属施設・図書館](#) | [入試案内](#) | [教育・学生生活](#) | [就職・進路](#) | [研究・産官学連携](#) | [地域貢献](#) | [国際交流](#)

[個人情報の取り扱いについて](#)

[このサイトについて](#)

[教員・職員募集](#)

国立大学法人 岐阜大学 〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 TEL (058)230-1111 (代表)

Copyright © Gifu University. All Rights Reserved.

	応用生物科学部		農学部			農学研究科				
	食品生命科学課程 (応用生命科学課程)	生産環境科学課程	生物資源生産学科	生物資源利用学科	生物生産システム学科	応用生物科学 資源生命科学専攻 (応用生命科学専攻)	生物環境科学専攻 (生産環境科学専攻)	生物資源生産学専攻	生物資源利用学専攻	生物生産システム学専攻
2004			61	60	47			32	34	21
2005			57	60	61			29	34	25
2006			48	63	46			21	32	16
2007	81	91	5	2	0			24	53	21
2008	92	94		2	1			30	40	16
2009	88	81				44	48	1	1	1
2010	90	85				45	39	1	0	1
2011	74	89				53	43			
2012	87	84				49	50			
2013	88	88				48	42			
2014	86	86				34	40			
2015	81	90				46	39			
2016	85	83				50	44			
累計	852	871	171	187	155	369	345	138	194	101